拠点外空間での保育に着目した 小規模保育拠点運営の実態と保育者による都市環境評価

京都・昼間里親と大阪・保育所分園制度を対象として

STUDY ON THE EVALUATION OF URBAN ENVIRONMENT AS CHILD NURTURING ENVIRONMENT BY STAFF OF SMALL BASES FOR CHILD-CARE

Focused on the daytime-guardian system (Kyoto) and the branched day-nursery system (Osaka)

山田 あすか*

Asuka YAMADA

This paper aimed to research about the small bases for child-care that used the environment of the cities such as parks for their childcare.

First, design of institutional arrangements and actual situation of administration were arranged targeted the two systems, daytime-guardian system (Kyoto) and the branched day-nursery system (Osaka).

Next, Evaluation comments to the environmental element of the urban space by the staff of bases were collected when the staff and children used the urban space as child nurturing space with Caption Evaluation Method.

And, some matters pursued in the urban environment as the place of the childcare were derived by analysis and consideration.

Keywords : small bases for child-care, group home, child nurturing environment, evaluation of urban environment, caption evaluation method

小規模保育拠点, 保育環境, 都市環境評価, キャプション評価法

1. 背景と目的

1.1 社会的背景

我が国では、少子・超高齢社会、人口減少社会の到来に鑑み、労働人口を保ちつつ世代の安定的な推移を図るため、子育てと就労の両立を支援する施策が求められている。現実には、共働き・一人親世帯の増加や核家族化の進行などとともに増大・多様化する保育ニーズは充足されていない。このため特に都市部で年少児を中心に待機児童問題が顕在化して久しく、定員を超過しての児童の受け入れや保育所の増設などの対策が行われている。しかし、保育サービスの供給が潜在需要を顕在化する構造もあって待機児童は解消しておらず、就労支援の観点からも早急な対策が必要とされている¹⁾。

待機児童がいる一方で少子化傾向があることも保育所の増設を困難にしている。従来の大規模保育施設を建設する手法では資金や土地の取得、建設に時間を要するため、保育ニーズに直ちに対応しにくく、また将来的に保育ニーズが減少した場合に施設が余剰する可能性がある。そこで自治体によっては、家庭保育福祉員(家庭福祉員、保育ママ)や保育所分園、自治体独自の認証・認定保育施設などの制度で、住宅や既存建物を利用した小規模な保育施設を設けている。

このような小規模保育拠点を地域に多数配する保育サービス配置手法は、従来の大規模保育施設建設の手法に比べて整備が容易かつ安価で、その時々地域の保育ニーズに応じて保育の提供を迅速に開始でき、かつ将来の保育ニーズの変動に対応しやすいという利点

がある。一方で多くの小規模保育拠点では園庭などの外部保育環境を独自にもたないため、室内だけの保育ではこどもに適切な発達刺激を保障することが難しいという懸念もある。このためこうした保育拠点による保育サービス提供を行うためには、公園などの都市環境が周囲に適切に整備されていることが必須の条件となる²⁾。

1.2 理論的背景

保育を提供する小規模な施設や保育の環境についての既往研究には、家庭福祉員当事者らの視点に基づく田島・伊志嶺らの家庭福祉員による保育制度の現状や課題に関する研究²⁾、地域の子育て支援施設の利用実態に関する研究³⁾や北浦らの夜間保育所に関する研究、赤木らの駅前保育施設に関する研究などがある^{4)~5)}。特に田島らの研究²⁾では、家庭福祉員制度は家庭的な密度の濃い保育や保育時間に融通が利くことなどが利点である一方、福祉員の労働環境や保育の質の保障に課題があるとし、認可保育所との連携や支援センターの設立を提言するなど保育の現場に根ざした価値ある指摘がなされている。しかしこれらの研究では、小規模な保育拠点での保育で活用され保育や発達の保障を支えるスペースである公園などの都市環境については十分に論じられていない。松橋・谷口らの横浜市の保育施設を対象とした研究では、公園や商店街、地域施設などを地域の資源として園外での保育が日常的に行われ、施設内部だけでは保障しきれない子供たちの様々な体験の場として活用されていることを報告している^{6)~8)}。また施設外部の屋外保育空間について、

本稿は、木村拓真氏(立命館大学理工学部建築都市デザイン学科卒業、2008年3月)との協同研究による成果を参照し、まとめられたものです。

* 東京電機大学未来科学部建築学科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Department of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki University, Dr. Eng.

小池ら⁹⁾は、小規模保育施設による公園や住宅周辺のオープンスペース等の都市環境利用の実態をこどもの活動に焦点をあてて報告している。これらの研究では保育施設を拠点に周辺地域が保育空間として活用されていることが明らかにされ、その重要性が示唆されている。しかし、こうした施設外の屋外空間を利用する際に保育者がどのような視点で環境を捉え、保育空間としての安全性や遊び場としての価値を見いだしているのかは十分に論じられていない。また、具体的にどのようなことがらが課題、あるいは保育に役立つ環境要因だと認識されているのかについては十分に整理されていない。

1.3 研究の目的

以上より本稿では、公園などの都市の環境を保育の場とする小規模保育拠点に着目する。この小規模保育拠点での保育の提供を支える環境としての都市空間整備に資する知見を得るため、まず対象とする小規模保育拠点制度の設定上、環境面でどのような配慮をしているかを整理する。さらに、小規模保育拠点の保育者が拠点外の都市空間を保育の場として利用する際に、都市空間の環境要素に対してどのような評価をしているかを明らかにすることを目的とする。この際、評価の内容を具体的に捉える調査法を採用し、保育者による都市空間での保育現場での環境評価の実態を把握し、分析の対象とする。また、今後の環境整備への展開を考慮し、所轄の自治体への意識調査を併せて行うものとする。

なお本稿は、仕事と子育ての両立の困難さや少子化などの子育てに関する問題を都市構造¹²⁾の観点から考究する研究の一環である。

1.4 研究の対象

小規模保育拠点としては、家庭保育福祉員（定員2～3人、5人など）から認可保育所の分園、自治体独自の認証・認定保育施設（東京都認証保育所の定員20～120人など）が挙げられ、それぞれ保育拠点の規模や運営の仕組みが異なる。本研究では、将来的にはこれら種々の小規模保育拠点から都市空間を保育の環境として利用する際の環境への意識や評価、必要とされる空間整備を捉えていく。まず本稿では、京都市の昼間里親制度を主たる調査対象に設定する。この制度は、わが国における自治体主導による家庭的で小規模な保育拠点の先駆けであり、現在国が推進している「家庭的保育事業」（家庭保育福祉員、保育ママ、など）制度のモデルともなった事業である。また、同保育事業の規模設定や運営の仕組みによる特徴を考察するため、上記の小規模保育拠点のうち、運営の規模や仕組みが認可保育所の形態に最も近い保育所分園制度（大阪市）を比較対象とした。

2. 研究の方法

2.1 調査対象

京都市での対象保育拠点は、京都市にある全32箇所の保育拠点のうち、調査許諾を得られた8拠点である。大阪での比較調査対象とした保育拠点は、保育所分園のうち調査許諾が得られ、かつ類似した形態の運営事例が多い2拠点である。対象保育拠点の一覧は表3の通りで、立地する地域はいずれも京都市、大阪市の都心部に位置し、住宅系用途地域と商業／工業系用途地域が混在している。

2.2 調査概要

調査対象とした小規模保育拠点制度の概要や運営上の課題、都市環境との関わり等を概観するため、自治体へのヒアリング調査を行った（表1）。各保育拠点での調査内容は、Ⅰ：運営概要と外出状

況についてのヒアリング調査、Ⅱ：終日の活動の様子についての観察調査、Ⅲ：キャプション評価法^{10, 11)}による都市環境についての評価コメントの収集とした¹²⁾。なお、調査Ⅲについては、主な外出先・外出ルートをヒアリングし、それが複数あると回答した事例のうち、調査協力を得られたKA、KBは、それぞれ2ルートを調べた¹³⁾。

3. 自治体へのヒアリングによる小規模保育拠点制度の概要

調査対象とした小規模保育拠点事業の、自治体の保育行政全体のなかでの位置づけを得るため、表2に自治体へのヒアリングによる自治体圏の保育行政の状況と小規模保育拠点の概要を整理した。

3.1 調査対象自治体の保育行政の概要

1) 京都市 京都市では、市域全体での児童数全体は減少の傾向だが、一部地域では住宅の建設などによる人口流入によって就学前児童数が増えている。また女性の就労率の上昇や子育て世代での核家族の増加が影響して保育ニーズが増し、特に0～1歳での待機児童が多い。京都市の保育所の9割は民設民営だが、近年人口流入が進む中心地では用地取得等の問題があり新設は困難である。このため、保育所新設だけでなく既存建物の増改築や定員の緩和、昼間里親制度によって受け入れ定員を増やす方向で施策を進めている。

2) 大阪市 大阪市では、女性の就労率の上昇や子育て世代の転入に伴い保育ニーズが増加し続けている。慢性化した待機児童問題の解消のため、財政や将来の保育ニーズの変動も見越して、新規の保育所建設だけでなく保育所分園や認定こども園（幼稚園空き教室と人材の有効活用）、保育ママ制度を組み合わせた施策を実施している。保育ママ制度は立ち上げたばかりで、また法人への委託による制度設計の影響もあつて手がなく（表2、保育料と委託）、事業の展開は進んでいない。一方、保育所分園制度は整備が進んでいる。

3.2 調査対象とする拠点事業の概要と役割

1) 京都市・昼間里親 対象児童は0～3歳（学齢制の0～2歳児）で、1拠点の定員は5名ないし10名¹⁴⁾である。保育の場は一軒家を原則としており、小規模で家庭的な保育が行われる。このため保護者が低年齢児のうちは小規模な環境で育てたいと考えている。大規模な園には発達や性格の面でなじみにくい、などの事例で就園相談がある。歴史がある制度のため地域に根ざして運営され、地域との日常的で自然な交流がある。保育規模は国の家庭的保育事業のガ

表1 調査概要

Ⅰ：運営概要と外出状況についてのヒアリング調査	
・運営責任者に対するヒアリング 拠点の概要、設立経緯、人員配置、保育理念、外出の状況などの事項を聞き取った	
Ⅱ：終日の活動の様子の観察調査（京都市のみ）	
・調査員が拠点に終日滞在し、30分または保育場面が変わるごとにこどもたちの活動の様子と位置を記録	
Ⅲ：キャプション評価法による都市環境についての評価コメントの収集	
・外出先にある事物について、写真および保育者の評価とコメントを収集 ・主な外出先・外出ルートが複数あった事例のうち、調査協力を得られた場合は各2ルートを調べた	
【撮影された写真と記述例】	
<p>*キャプション評価法 評価者の環境への評価を収集する調査法。 調査員が外出先へ同行し、図2のように保育者に「満足（好き・良い）／不満（嫌い・悪い）／満足でも不満でもないが気になる」ことから指摘してもらい、その理由コメントの記録と、対象の写真撮影を行った。</p>	<p>No.208 時間帯 午後 タイトル 公園の遊具 撮影した環境要素について 満足・不満 ・どちらともいえないが気になる 理由 (大きなお母さん の顔がある)から 促しやすい、安全</p>

イドラインに比べて大きいのが、少子化を踏まえてこどもに集団体験を保障する、きょうだいで就園しやすい、また経営・運営の安定の面からちょうど良い人数規模だとの考えが聞かれた。現在の拠点数は32で、拡充を目指しているが予算の問題で整備が難航している。

2) 大阪市・保育所分園 保育所分園は、認可保育所（本園）と提携する園で、定員は30名まで。対象児童は認可入学年齢の0～5歳児だが、実際はおおむね年齢0～2歳児が利用している。大規模な保育所にこども自身の発達や性格などの理由でなじめないケースでの就園希望もあり、従来に比べて小規模で家庭的な保育環境が評価されている。コスト、即効性、定員増のバランスという保育行政施策にも、保護者の保育所選びにも選択肢があることが大切との考えであり、保育ママなどさらに小規模な拠点と併せて整備を進める方針である。拠点数は現在72で、さらに数を増やしたいが母体となる保育所（法人）からの応募がなく、行政からの依頼を重ねている。

3.3 行政による保育環境としての都市環境の認識

小規模保育拠点の整備にあたり、認定の条件には昼間里親、保育所分園とも、拠点到屋外で遊べる場所をもつか、拠点の近隣に外出保育の場所があることが要件にある。しかし詳細な条件はなく、例

えば公園への距離や時間距離、経路などの規定はない。外出先の状況についての認識を尋ねると、いずれも公園、寺社などが多いためこれ以上の都市環境の整備などの必要はないと認識していた。

4. 保育拠点へのヒアリングによる小規模保育拠点の利点と課題

4.1 保育対象について

調査対象とした小規模保育拠点の運営者へのヒアリングの結果を表3にまとめた。この結果から小規模保育拠点での保育対象については、昼間里親・保育所分園とも現在の主たる利用児である年齢の0～2歳児までと考える運営者が大半であり、それ以上の年齢の場合は発達に伴う行動範囲の拡大やこども集団との関わりにおいて適切な発達環境を保障しかねるとの回答であった。同時に、現在の面積基準などがいまの保育対象のこどもにとって狭いという意見もなく、現在の保育対象への環境としては充足されているといえる。

4.2 小規模保育拠点事業の利点

小規模保育拠点の利点として指摘されてきた、家庭的な保育環境やなじみやすさ、保育者との信頼関係の築きやすさ²⁾は、昼間里親でも同様に挙げられ、また異年齢児が混在するため低年齢児の世話

表2 自治体へのヒアリングによる小規模保育拠点事業の概況

質問事項	京都市（昼間里親）	大阪市（保育所分園）
1・自治体圏の状況	共働きや核家族の割合 児童数（出生率、人口） 保育ニーズと待機児童数 保育行政の方針	女性の就労率は経済動向によらず増加傾向。核家族率については、もともと地方からの転入が多く従来から核家族が多い地域であり、変化はあまり見られない。 児童数は減少。しかし集合住宅を含む大規模再開発で人口が流入しており、保育ニーズが増加。保育所の定員を増やしているが潜在需要もあり待機児童が解消されない。 周辺自治体と比べても待機児童は700人近く多い。保育所定員増によって、待機児童は減少しているが完全な解消にはほど遠い。一部地域では再開発などで小学校が新設されるほど児童数が増加しているなど、地域差がある。中心部では保育所の新設は用地やコストの観点から難しい。
	小規模保育拠点の状況	①民設民営での新設（本園）、②分園、③幼保連携型の認定こども園を2010年までに低コストで充実させる（ニーズの将来的変動を見込んで）。認定こども園は大阪府と連携して整備の方針だが、現状では市内0カ所、府内2カ所。 市内には認可外保育施設が多く、事業者の入れ替わりはあるが届け出を受けて登録しているもので120カ所弱。多様な勤務体系などを背景として、24時間開所のベビーホテル（夜間保育所）や事業所内保育施設も含まれる。保育者数や資格、保育室面積、保育室設置階数などの条件に基づき、立ち入り調査を行う必要がある場合には改善指導を行っている（基準を満たすものは21年1月半ば）。
	自治体としての小規模保育拠点事業への取組	保育所の分園制度と、保育ママ制度を同時平行で実施・推進している。
	制度の概要	現在72カ所。コストが低く即効性があり推進したいが参入法人が少ない（経営や安全管理の面で本園の方が有利）。 当初H19-21の3年間の計画だったが継続。現状は4カ所。コストが低く即効性があり増やしたいが、なり手がいない。
2・自治体圏での小規模保育拠点の状況	対象児童と定員：0～3歳（満3歳になる年度の年度末まで、年齢制の「2歳児」）。その後は保育所に移行。一カ所で10名まで。 保育者：受け入れ児の年齢に応じて、必要な保育スタッフを運営責任者が事業主として雇用する。（0歳児は3：1、1歳児は5：1、2歳児は6：1） 運営者の条件：保育士や看護師の経験が3年以上あり、50歳まで建物の条件：一軒家であること（自宅でも、賃貸物件でも可。テナントビルや集合住宅での運営は不許可。騒音や安全面、家庭的な保育の実現を重視）。2方向避難の確保や、衛生条件などを現地調査にて確認。1人当たり面積は2.64㎡（50㎡以上変更なく、実態に鑑みて妥当と考えている）。 近隣環境の条件：外出先の公園などは、申請者の判断。昼間里親の事例は中心部よりもやや周辺地域なので、公園の充実度などの近隣環境はあまり問題でない。 保育料：京都市と昼間里親で委託契約を結び、こどもの年齢と人数に応じて委託料を決定する。保育料は、保護者が京都市に納める。また昼間里親での給食費は実費として別途徴収なので、保護者が払う利用料は保育所利用料よりは若干安い。 ・保育所との提携関係はない。 ・市の専任保育士（保育課所属）が保育プログラムをみて、年間計画やディリーブプログラムをもとに指導や助言を行う。保育内容の検討が不十分な事業所もある。	対象児童と定員：0～5歳。30名まで。 実際には年齢の0～2歳児が大半。 保育者：資格、配置は認可保育所に同じ建物等の条件：面積基準等は認可保育所に同じ（大阪市基準：5㎡/0歳児1名）。制度設計当初（H13）は駅前など交通アクセスの要所が条件だったが、賃料が高く環境が悪いため、駅近くという要件は撤回した。保育所に相応しい建物物の改修の場合は許可しない。 保育料と委託：保育料は認可保育所に同じ。大阪市から本園に補助金が降りる。本園との連携：給食は本園から運ぶ。分園に園費がないため本園で遊び、分園と本園のこどもの交流がある場合もある。7キロ離れて立地するケースもあり、本園との連携体制はまちまち。
	事業の狙いと利点、課題点	利点：短期間整備、（駅前立地）利便性、将来への対応、少人数制に対するニーズ、課題点：園庭の不備、給食（キッチン設備を持たないケースや、人件費）。市としての、運営助成金に加えて本園と分園のバイク役への人件費を補助。民間に人的余裕や補助の不備もあり希望がない。 「今している保育所になじめない」などの問い合わせがある。保育ママ、分園がある区の担当部署には知識があるが、その他の区ではあまり周知されていない（大阪市に問い合わせが回送される）。制度は認知され始めた段階という印象。小規模な保育や家庭的な保育のニーズは一定数ある。いまは本園と分園の連携が行われている段階だが、制度が定着すれば今後地域の施設などとの連携が進むと考える。
	地域（保護者）の受け止め方	設置や推進に向けて基準などのハードルを低くすることが検討されている。また、コスト面（補助が不十分）に課題があり、解決策を模索している。就園相談があれば情報提供/斡旋をしている。選択肢を用意することが重要と考えている。
	制度推進の取組、広報	保育所分園、保育ママとも推進していることとしているのに手がいけないこと、人的余裕がないこと、認可保育所運営とのコスト面でのバランスが不十分なことなどが原因と思われる。適切な助成を検討している段階。
	制度運営上の困難	財政的な裏付け。保育ママ制度は国からの補助金も受けられるが、昼間里親制度は京都市独自の制度なので、京都市からだけの補助になってしまう。また、京都市との契約で実施しているので、地域（区単位の行政）との連携が不足しがちである。

を介して弱い者への思いやりの心が育まれることが挙げられた。一方保育所分園では、認可保育所に比べ小規模であるための利点は挙げられず、駅に近いなど保護者にとっての利便性が指摘された。保育所分園では各年齢児 10 人前後で、2 拠点とも年齢ごとにクラスを編成している。このような人数規模の違いがもたらす運営状況の違いが、こどもにとって小規模な保育環境であることの価値についての考えに差異が生じる要因となっているのではないかと考える。

4.3 外出保育の状況と拠点外の場所や環境への要望

1) 外出保育の頻度と内容 外出保育は、KG を除くすべての拠点でほぼ毎日、いずれも 1 時間～1 時間半程度行うとの回答で、既往研究での指摘^{6)～9)}と同様、外出保育は日常の保育の一環である。小雨程度ならば外出する拠点もある (KC, KD)。外出の範囲は、昼間里親では 15～30 分以内、保育所分園では 5～15 分の場所で、昼間里親は保育所分園よりも時間距離による行動範囲が広い。外出先には近隣の公園、少し離れた大きな公園、寺社境内、が挙げられた。保育の内容には電車の見学、虫やドングリなどの採集遊び、公園での遊具遊びなどが挙げられ、昼間里親と保育所分園で差異はない。

2) 都市環境への要望 外出保育に際しての地域の環境への要望として、緑地や自然 (KB, OB)、雨天時に遊べる室内型の遊び場所 (KA, KH)、拠点近くの公園 (KC, KD, KF, KG, OA)、安全・快適な道空間 (KC, KD, OA, OB) が挙げられた。この結果には昼間里親と保育所分園で差異はない。これらの小規模保育拠点ではいずれも、拠点内部のみの保育でこどもへの適切な発達環境を保障することは難しく、外出しやすい環境を整えることが必要だと確認できる。また自治体へのヒアリング (表 2) では、自治体としては京都市・大阪市とも公園や寺社が地域に多くあるため外出保育の場所については支障ないとの見解であったが、小規模保育拠点の運営者には上記、公園等の要望がある。また自治体としては道空間の重要性について認識はなかったが、運営者はこどもを連れた移動にあたって道空間の整備を求めているという認識の差異が把握できた。

3) 拠点内部での保育と外出保育の関わり 小規模保育拠点内部での 1 日の生活の様子を図 1 に例示する。外出保育の時間は 1 時間～1 時間半程度だが、外で見た電車や金魚の絵を拠点で描く、採集してきたドングリを使って工作をするなど、外出保育での体験を拠

表 3a ヒアリング結果一覧

		(*定員の125%は登録可)				
記号(所在地)		KA(西京区)	KB(中京区)	KC(南区)	KD(山科区)	KE(伏見区)
都市計画区域		第一種中高層住宅専用地域	近隣商業地域	工業地域	準工業地域	第一種住居地域
周辺図
縮尺 0 50						
平面図・所室構成
1/24000						
開設		H19	S57	S61	S55	S61
調査日		I・II:08.08.28, III:08.09.09	I・II:08.08.29, III:08.09.12	I・II:08.08.27, 08.09.10	I・II:08.08.20, III:08.09.24	I・II:08.08.25, III:08.09.25
開所日・時間		月～土 07:30～08:30～17:00～18:00	月～土 07:30～08:30～17:00～18:00	月～土 07:30～08:30～17:00～18:00	月～土 07:30～08:30～17:00～18:00	月～土 07:30～08:30～17:00～18:00
設立経緯		保育所不足時の自主事業～昼間里親として母親が30年弱運営した昼間里親事業を地域の保育拠点として継続。	当初は他区で保育。数年前に中京区に移転。近隣のこどもを預かっており、空き部屋があったため昼間里親に応募。	保育園勤務時、こどもに一貫して関わりたいと考えたため。当初共同運営していた義姉は現在別に昼間里親を運営。	仕事との両立など子育てに困っている保護者に安心してもらえるよう、就労保障と発達保障を目的に保育室を設立。	保育ニーズに比して保育所が足りずベビーホテルが乱立し、劣悪な保育環境を改善し、安心して子育てができる環境を実現にしたい。
利用児・職員		定員(登録)* 5人(6人) *保育者交代で5名定員に 利用児数 0-1歳 0人、1-2歳 1人、2-3歳 5人	定員(登録)* 10人(12人) 利用児数 0-1歳 3人、1-2歳 5人、2-3歳 4人	定員(登録)* 9人(11人) 利用児数 0-1歳 3人、1-2歳 3人、2-3歳 5人	定員(登録)* 13人(14人) 利用児数 0-1歳 6人、1-2歳 5人、2-3歳 2人	定員(登録)* 12人(14人) 利用児数 0-1歳 3人、1-2歳 5人、2-3歳 2人
受け入れ基準		病児保育、病後保育はしていないが障 碍児保育は状況による。	障児保育は受け入れている。病児保 育、病後保育は状況による。	病児保育はしていないが、病後保育と 障児保育は状況による。	病児保育、病後保育、障児保育は状 況により、明確な基準はない。	病児保育、病後保育は受け入れている が、障児保育は状況による。
職員数		3人(5人) *経験豊富な母親が補助	10人(月～金曜日) 2～3人(土曜日)	4人(7人)(月曜、木曜、金曜日)	6人	5人
異年齢児保育での配慮		現在はたまたま0歳児はいない。年齢別、発達別によることも一人一人のリズムの調整を大切にしている。	3歳まで、成長につれて行動空間が拡大する中で年齢が異なる子どもが一緒に遊ぶ機会が多くなる。年齢に即すのではなく、発達に即した保育。	特に午前中は、こどもの発達に合わせた身体遊び、年齢ごとの発達に応じた遊びをするように心がけている。	こどもたちに「昼間のきょうだいで」と思ってもらい、共に育ちあふ関係づくりを大切にしている。	大きい子が小さい子をいたわるなど、さまざまなことを自然に学ぶ。異年齢の育ち合いは価値が高い。
ここでの保育に適するこども像		3歳まで、行動空間の拡大や遊び相手の移行(保育者・同年代の子どもの集団)のため、保育園にないような子集団への慣れへのステップでの利用もある。	定員の増減により保育士の配置などに困難がある。また、昼間里親の特徴でもある異年齢児の構成により毎年保育の仕方、仕様が変更を強いられる。定員不足時の保障、保育場である自宅の修繕費、場所代などの補助等について、行政上の配慮が欲しい。	保育上の困難は特に感じない。運営上は定員の不足、保育園が定員の閉め切りが9月ということもあり、4、5、6月は定員が不足すること。定員不足時の保障、保育の場である自宅の修繕費、場所代などの補助等について、行政上の配慮が欲しい。	昼間里親は京都市からしか補助金が出ない。保育士(専門職)としての扱いに対して疑問を感じる。安心して働けるよう健康保険などの補助や退職金等の福利厚生を充実させてほしい。保育の場として自宅を提供することに対する補償(家賃や修繕費など)がない。	運営上、国からの補助金がなく京都市からの補助しか受けられない。自宅を使用しているため、保育園と同じ補助を求めたい。保育士に4月に定員が揃わないため(職員の確保や保育の組み立て等)安定した保育が困難。委託料の引き上げなど支援を強化してほしい。
運営・保育上の困難を感じるこども像(保育行政への要望など)						
過点・過少の対応		遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会など多くのイベント	遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会など多くのイベント	遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会など多くのイベント	遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会等	遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会等
お絵描き、積み木等		お絵描き、積み木等	お絵描き、積み木等	お絵描き、積み木等	お絵描き、積み木等	粘土、まますとあそび、お絵描き、マツト遊びなど、季節により変化する。
外出頻度		週5回、1日1時間(夏、冬の日や風の強い日は除いて)	週5回、1日1時間(夏、冬の日や風の強い日は除いて)	週5回、1日1時間(小雨でも出かける)	週5回、1日1時間(小雨でも出かける)	週5回、1日1時間(雨の日を除いて)
外出時間		移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半	移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半	移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半	移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半	移動15～20分 滞在30～40分 外出時間計1時間程度
外出先		近隣の公園、都市公園(近くに公園が多い)、団地内の公園、幼稚園の園庭開放等	二条城、京都御苑、寺社の境内等、中心地にあり便利なのでタクシーでの出がかも頻繁。	吉祥院運動公園、内河原公園、三の宮公園、吉祥院小学校、吉祥院公園等	川田公園など近隣の公園、車や新幹線を見に行く等	近隣の公園、2キロ範囲内の公園、駅や疎水沿いの道、遠方の公園など、三歳の卒園時に伏見山の頂上まで登る。
外出時の人数		こども:5人(全員)、引率者:2～3人	こども:12人(全員)、引率者:そのときの全員	こども:状況による(歩ける子)、引率者:こども3人に対して1人	こども:全員(11人)、引率者:基本的にはそのときの全員	こども:歩ける子全員(6歳児は状況による)、引率者:3～4人
遊びの内容		電車を見学しに行く、ドングリなどの木の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等	電車を見学しに行く、ドングリなどの木の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等	ドングリなどの木の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等	公園やその経路である道空間(歩道、緑道)を整備して欲しい。日差し対策としての並木などこどもがゆっくりと遊べるまちづくりを考えてほしい。	電車を見学しに行く、ドングリなどの木の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等
求める拠点外の場所や環境		雨天時に利用できる室内型の遊び場や、夏場プールなど水遊びをする場所が欲しい。家庭での子育ての支援と同様に拠点外の空間が必要になる。	都心部での子育てなので、自然を感じられる場所が不足している。人工的なものではなく、緑地や自然が多くある環境づくりを要望したい。	歩道と車道(自転車)を分別してほしい。車より自転車の方がこどもにとって危険。また、公園の手入れや場所の有効活用ができる地域づくりを進めてほしい。		

点内部での保育に取り入こんでこどもの活動内容が組み立てられている様子が観察できた。こうした保育内容は、こどもたちの多様な体験や興味・関心の拡がりにつながっているといえ、外出保育の充

実によって拠点内部での保育がより充実すると考える。またこうした場面は昼間里親、保育所分園のいずれでも観察されたことから、拠点の規模によらず外出保育に意義があるといえる。

図1 内部空間の観察調査による1日の活動の様子

表3b ヒアリング結果一覧

KF(右京区)	KG(伏見区)	KH(北区)	OA(大阪市中央区)	OB(大阪市淀川区)
第一種低層住居専用地域	第一種住居地域	近隣商業地域	第二種住居地域	第二種住居地域
1F 	1階を保育スペースとして使用 	2階建ての1階を保育スペースとして使用 	駅前のビル1階を保育スペース、2階を事務所として使用 	駅前のビル4階を保育スペース、3階に他の保育所分園がある
H15 1・11・13:08.11.05 月～土 07:30～08:30～17:00～18:00 保育勤務時に一時保育事業に携わり、異年齢保育や保護者の精神的ケアの必要性を感じ、福祉事業所が後押し。 9人(11人) 0-1歳 4人、1-2歳 6人、2-3歳 1人 病児保育、病後保育、障り児保育とも受け入れている(受入経験あり) 4人 全員での共感を目的として年齢に関係なく同じように接している。年齢で区分するのはなく、発達に応じて区分。 保育園になじみなかったこどもたちが徐々に集団に慣れしていくステップとしての利用もある。必ずしも低年齢児でなくともよい。 特に感じない。定員もすぐに集まり、入れない保護者や園児に土曜日に保育場を提供している。また、電話や訪問等で保護者の精神的なケアもおこなっており、状況に応じて相談を受けている。保育行政への要望としては、保育士の人材の保障、人材の確保などが挙げられる。 遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会等 お絵描き、積み木等 週5回、1日1時間(夏、冬の日や風の強い日を除いて) 移動15～20分 滞在30～40分 外出時間計1時間程度 フローラルコート(花壇)等 こども:11人(全員)、引率者:4人(全員) 電車を見学しに行く、ドングリなどの木の葉の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等 近くに公園が少なく、近隣の家の庭先などを借りている。小規模な児童遊園なども設置して欲しい。車で通うこともあり、交通機関にも配慮が欲しい。	S51 1・11・13:08.10.27 月～土 *保護者の状況に応じて変更 07:30～08:30～17:00～18:00 昼間里親事業の存在を知っていた。自身の家庭事情もあり、家で働けなくなった困る、という思いもあった。 14人(17人) 0-1歳 5人、1-2歳 5人、2-3歳 7人 病児保育、病後保育は状況、程度による。障り児保育は受け入れ。 7人 0歳児の面倒を1-3歳児が見ている。自然とできるような環境にある。異年齢児が合同で遊ぶように心がけている。 交通の便がよく、融通がききやすいことを評価する家庭に向く。今はパート勤務の保護者が多く、時間的に楽になった。 京都市が昼間里親への保育希望を募集していない。口コミだけの入所となっており、定員に満たないことが問題。これは、保育士の雇用の安定にも関わるため、運営上の困難と認識している。その他に委託料や保育場である自宅の修繕費などには補助があった方がよい。 遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会など多くのイベント 粘土、まますこあそび、お絵描き、マット遊びなど、季節により変化する。 (*)最近、変質者が付近に出現しているため外出を控えている状況。 移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半 近隣の公園や大型ショッピングセンター、寺院の境内、植物園、キコロ程度の公園等 こども:7人(全員)、引率者:4人 電車を見学しに行く、ドングリなどの木の葉の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等 雨天時に利用できる屋内型の遊び場所。	H15 1・11・13:08.10.22 月～土 07:30～08:30～17:00～18:00 区内の昼間里親事業で補助員を経験したことがきっかけで、昼間里親として独立した。(独立のケースは多い) 7人(8人) 0-1歳 2人、1-2歳 3人、2-3歳 2人 病児保育、病後保育、障り児保育は受け入れてはいない。 5人 2-3歳児と0-1、1-2歳児と一緒に遊び、小さい子の面倒を見るようにしている。次第に、自然とできるようになる。 3歳まで、こどもが行動する空間が拡大し、部屋の大ささ、室内環境だけでは物足りなくなっていくから。 4月始めに定員が集まらないこと。今年度は4～6月にはこどもが1人しかいなかった。年度の途中で定員は埋まるが、定員不足時の収入保障が欲しい。保育士の雇用と収入保障の面からも、保育士に対する人件費補助も含めて援助が欲しい。 遠足(月1回)、プール、運動会、クリスマス会など多くのイベント お絵描き、積み木等 週5回、1日1時間(雨の日を除いて) 移動15～30分 滞在30～60分 外出時間計1時間～1時間半 近隣の公園や大型ショッピングセンター、寺院の境内、植物園、キコロ程度の公園等 こども:7人(全員)、引率者:4人 電車を見学しに行く、ドングリなどの木の葉の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具を使った遊び等 雨天時に利用できる屋内型の遊び場所。	H16 1・11・13:08.11.20 月～金 07:00～19:00 土 08:00～18:00 最近、本園周辺地域で急増した保育ニーズに応えるために、低年齢児向けの分園として設立。 30人 0-1歳 6人、1-2歳 11人、2-3歳 13人 病児保育、病後保育は受け入れていない。障り児保育は状況による。 14人 クラスは年齢ごとに編成している。外出時も年齢クラスごとに外出。季節ごとのイベントなど全年齢で楽しむ行事もある。 制度上は学齢の5歳児までの登園が可能だが、実際には0～3歳児の、4～5歳児では預かり保育のある幼稚園もあるのでニーズが分散する。 運営上の困難としては、大阪市からの保育費が少ないので保護者にも負担をかける得ない状況である(給食補助費として保護者に寄付をお願いしている)。また、保育士の数自体が不足していることも挙げられる。 遠足(年2回、2-3才児)、プール、運動会、クリスマス会、ハロウィンなど多数 お絵描き、積み木、ねんど遊び等 週4回、1日1時間(雨天を除いて) 移動5～15分 滞在30分 外出時間計1時間程度 近隣の公園を中心に(銅座公園、難波宮跡公園、広小路公園、大阪城公園等) こども:全員、引率者:2～3人(クラス別、年齢ごとに外出。外出先も異なる) ドングリなどの木の葉の採取やバッチ、チョウなど昆虫採取、公園での遊具や砂場を使った遊び等 0-1才児のように遠くまで歩けないこどもたちもいるため分園のより近くに公園が欲しい。また、交通量が多く安全面から車の通らない路地を作してほしい。	H13 1・11・13:08.11.28 月～金 07:00～19:00 土 08:00～18:00 待機児童が増えており、その解消を目的として大阪市からの要請で設立。 41人 0歳 9人、1歳 10人、2歳 11人、3歳 11人 病児保育、病後保育、障り児保育すべて受け入れている。(現在も保育) 13人 クラスは年齢ごとに編成している。外出時も年齢クラスごとに外出。季節ごとのイベントなど全年齢で楽しむ行事もある。 駅前にあるので、ここを拠点に通園する園児の保護者にとっては便利である。学齢の5歳児までの受け入れが可能だが実際には0～3歳児のみ。 運営上:特になし。保育士:分園で駅前のビルにあるので園庭がない。園庭がないことで、毎回同じような遊びしかできず異なる遊びをすることができない。1人当たり3.3㎡などの基準が実際の(外部環境を伴わない)保育環境から見ると狭い。 遠足(年4.5回)、プール、運動会、クリスマス会、ハロウィンなど多くのイベント お絵描き、積み木、ねんど遊び等 週5回、1日1時間(雨天を除いて) 移動5～15分 滞在30分 外出時間計1時間程度 近隣の公園 こども:全員、引率者:全員(クラス別、年齢ごとに外出) 電車を見学しに行く、ボール遊び、砂遊び、フープ、公園での遊具を使った遊び等 駅前の分園で園児の保護者にとっては便利だが、ビルが立ち並び緑が少ない。また、交通量も多く危険。親自然的な遊び場所と安全な経路があると良い。

5. 保育者による保育環境としての都市環境評価

5.1 都市環境評価の結果の整理

調査が可能な昼間里親7例、保育所分園2例で、キャプション評価調査(表1)を実施した。以下、「満足/不満/気になる」の別を【評価】、指摘されたことがらを【対象】、評価の理由を【理由】と呼

ぶ。収集した評価の対象と理由を分解し、指摘があった場面を「滞在」と「移動」に分けた上で、既往文献¹³⁾に即して類似した内容をまとめ、表4のように整理した^{注6)}。この結果を整理の軸として、図3に【評価・対象・理由】の全体像を示した。また、拠点ごとにみた「滞在」「移動」場面別の【対象・理由】の内訳を図4に示す。

図2 保育者による都市環境評価の事例

表4 評価の対象と理由

	評価の対象																			評価の理由																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			
	滞留の場面									移動の場面										安全性	保育資源としての価値				印象 気分	移動しやすさ	衛生	その他																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
	遊具	設備	場所	舗装	管理・整備	自然・動物	見えるもの	そこから その他	道(種別 ・特徴)	舗装	道路の 設備	道路の 動物	道／経路にあるもの					管理・提供	敷地境界		通から見えるもの			遊 び 場 所					保育的 価値 素 材	遊 び の 動 作	教育的 価値 素 材	交流 ・興 味	他者との 関わり																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
													その他	汚物	危険物	その他	動物				自然	ポイント ・ビ ュー	道を通 るもの											迷惑	その他	自然	その他																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
実数																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																							</

5.2 評価の場面と【評価】

指摘された場面の「滞留」と「移動」の別をみると（図3、各右上）、昼間里親（68.7%）では「移動」場面での指摘割合が高く、保育所分園ではさらに高い（87.0%）、いずれの拠点でも（図4）、「移動」場面での指摘が「滞在」場面での指摘を上回った。表3の通り、保育所分園での移動時間は昼間里親の半分程度で、移動時間と滞在時間の比率は同程度だが、評価された場面では保育所分園の方がその割合が高い。つまり昼間里親に固有の特徴ではなく、拠点の規模によらず都市環境を保育で利用する際に意識することがらの大半が「移動」場面であり、その意識は移動にかかる時間によらず高いと指摘できる。外出保育での都市環境利用に際して地域環境への要望を尋ねると（表3）、「滞留」場面に分類される公園や屋内の遊び場所への要望が多かった。しかし実際には、移動の空間でさまざまな要望や環境要素の意義が示唆された結果となった。

次に、図3各左下に示した「滞留／移動」場面別の評価内容を見ると、昼間里親では「滞留」場面よりも「移動」場面で「満足」評価の割合が高いが、保育所分園では「移動」場面で「不満」評価の割合が高い。昼間里親の移動場面での「満足」評価は「道から見えるもの」「ビューポイント」「道」に対する「保育資源としての価値」

を理由とするものが保育所分園よりも多い。このことから昼間里親では、保育所分園よりも移動しながら移動自体（道）や道から見えるものを活かして積極的な保育がなされていると考える。この要因として、都市環境や外出保育児の人数規模の差異が考え得る。都市環境では立地に差異があり（5.3 2)), また外出人数および引率体制には、表2、3および観察より昼間里親では異年齢児5～10人（引率者：こども数＝1：2～3）、保育所分園では同年齢児10人程度（引率者：こども数＝1：5）と差異がある。昼間里親では、外出人数の規模が小さく引率者の割合が高いことでこどもの安全を確保しつつ移動空間での保育を積極的に行え、保育所分園での調査結果との差異につながったのではないかと考える。

5.3 評価の【対象】と【理由】

1) 評価の【理由】 評価の【理由】は、都市環境を保育の場として利用する際に発現する環境を評価する価値観と捉えられる。昼間里親での評価【理由】としては、「滞留」「移動」の場面とも「安全性」が多い。「安全性」は「不満」評価の割合が高く、危険を感じながら保育をしているとも、危険予測をしつつこどもたちの安全を確保しようと努めているともいえる。逆に「保育資源としての価値」では「満足」評価の割合が高く、「興味・発話のきっかけ」となったり、「遊

図3 【評価・対象・理由】の内訳の比較

図4 拠点ごとの滞留／移動場面別の評価【理由】

び場所」としての価値を評価するコメントが比較的多かった。

〔安全性〕〔興味・発話のきっかけ〕〔遊び場所〕についてのコメントが比較的多い傾向は保育所分園でも同様だが、保育所分園ではこれらの項目での〔満足〕評価の割合は昼間里親よりも低く、〔教育・運動の機会〕〔他者との交流〕といった【理由】は指摘がない。これには、調査対象とした保育所分園では年齢別クラスでの外出を行っており、2歳児クラスでは昼間里親よりも自分で動けるこどもの数が多い状況での外出となるため、外出保育時に遊びや運動を積極的に楽しむあるいは活かす余裕が少ないのではないかと考えられ、5.2の、引率体制と環境評価との関連の考察を補強する結果と考える。

2)【対象】×【理由】：安全性 評価の理由として多く挙げられた〔安全性〕は、保育の場として都市環境を利用する際には重要な価値観といえる。評価理由に多かった〔保育資源としての価値〕とともに、その内容を表4に子細に示した。昼間里親では保育所分園よりも〔安全性〕に関するコメントの割合が高く、〔滞留〕の場面では〔遊具〕〔場所〕についてこどもの利用への十分な配慮、公園や公園の設えへの十分な〔管理・整備〕について言及されている。また〔移動〕の場面では特に〔道路の設備〕についての指摘が多く、柵の老朽化や隙間が大きいこと、車両止めが車両進入に役立っている／いないこと、排水溝に蓋がつけられていること、などについて言及されている。

保育所分園では比較的指摘が多かった【対象】として、〔道路の設備〕〔道を通るもの〕〔迷惑車両〕が挙げられる。保育所分園2拠点では通行量の多さへの懸念はヒアリングでも指摘され（表3）、歩道などの整備環境よりも放置自転車や通行量に意識が向けられていた。これには、周辺環境が昼間里親よりも都心部に近いこと、また移動時間が短く長距離を移動しないことも関係していると考えられる。拠点の立地によって保育時の意識のありかが変わるといえ、昼間里親で見られた傾向は、立地上の特性を受けた結果と考えられる。

3)【対象】×【理由】：保育素材としての価値 保育の場として都市環境を利用しながら、保育の素材となる環境要素が指摘されたことは重要なことである。〔保育資源としての価値〕は、昼間里親と保育所分園のいずれも〔移動〕場面で多数指摘されている。なかでも〔道から見えるもの〕の指摘が多く、昼間里親ではさらに〔道（種別や特徴）〕〔ビューポイント〕での指摘が多かった。表4によってその内容を見ると、〔道から見えるもの〕では民家の庭先の人形や鉢植え、飲食店前の設えや電車などがこどもの興味・発話や知識をつけるきっかけとなっていることが指摘されている。また〔道〕では坂道や砂利道が運動の機会や遊び場になっている。〔ビューポイン

ト〕では歩道橋や跨線橋など眺めるものがある滞留できる空間がこどもたちの興味を引き立てる場所として指摘されている。昼間里親の〔置物・装飾〕×〔他者との交流〕では、家の前を通るこどもたちのために季節の飾りや人形などを置いてくれているというコメントがあり、こうした要素を介して地域住民との関係そのものが保育の素材となつていともいえる。これらから、都市環境のなかで様々なことがらが保育の素材として見いだされていることがわかる。また道に隣接する敷地の道に対する表情豊かな設えが保育素材となりうることもわかるが、こうした設えは保育の場としてのみならず広い意味での地域の環境づくりにもつながるものである。

4)【評価】の対立 対象によっては、〔満足〕〔不満〕の評価がわかれるものがあつた。例えば坂道について、「こどもが飛び出していきそうで（安全性）・危険だ」との意見がある一方で、都市的な環境でありこどもの身体能力の発達機会が重要であるため、「こどもを鍛えられるので（保育資源としての価値／教育・運動）・良い」との意見もあつた。同様のことがらが水辺（遊び場所-安全性）、丘（教育・運動-安全性）にもいえる。このように、評価対象物によっては〔安全〕や〔保育資源としての価値〕などの理由で評価が対立する様子も把握できた。こうした差異は、保育者や保護者の考え方や、こどもの年齢構成、周囲の交通量などや身体を動かす機会となる環境要素の分布等の周辺状況などの複合的要因によると考えられる。安全性の側面からの判断のみで環境要素を簡単に排除するばかりでなく、保育拠点に求める保育理念や対象年齢を勘案した場合には保育資源としての価値を積極的に見いだせる可能性を踏まえる必要がある。

5.4 移動／滞留と身体的干渉の有無による保育場面と評価

昼間里親、保育所分園とも、隣接敷地の植栽や電車など〔道から見えるもの〕への指摘が比較的多い。これらの【対象】には昼間里親、保育所分園とも〔不満〕評価がないことが特徴的である。これらの環境要素は遊具や道など直接身体的な干渉を伴う【対象】とは質が異なるため、指摘があつた保育場面での一定の領域への滞留の様子（滞留、移動中に立ち止まる、移動）と、身体的な干渉の有無（ない：見る、ある：体験する）によって指摘された内容を再整理し、図6に示す。また、評価の【理由】と保育場面の関係を図7に整理する。

図6、図7から、〔体験する〕場面では〔不満〕評価の割合が高く、ことに〔安全性〕を理由とした評価の割合が高いことがわかる。身体的な干渉が必要となるため、より怪我などの危険性が高く安全の確保に意識が払われていることが確認できる。

また図6から、〔見る〕場面は〔立ち止まる・見る〕と〔移動・見る〕

表5 〔安全性〕〔保育資源としての価値〕への指摘の詳細

凡例	評価の理由	評価の対象														
		滞留の場面					移動の場面									
		遊具	設備	場所	舗装	管理・整備	道（種別・特徴）	道路の舗装	道路の設備	自然・動物	ビューポイント	道を通るもの	迷惑車両	危険物・汚物	その他	道から見えるもの
昼間里親	安全性	■すべり台（サイドバー、周リ口の設置） □サイズの大小 □遊具下のマット	■背もたれがないベンチ ■水辺 ■岩場 ■丘	■コンクリート(2) □芝生	■壊れた遊具 ■ベンチ ●はげた芝生	■サイクリングロード ■坂道(2) □歩車分離型道路 □立ち止まれる	●スロープの舗装（すべりやすい）	■柵（老朽化、隙間、板の設置） ■車両止め（老朽化、2） ■排水溝の蓋 ■ガードレール ■手すり（高さ）	□並木	□草むら	■自転車 ●通行量が多い(2)	■放置自転車 ■駐停車両	■掲示板の面紙	□交通規制 ●傷んだ舗装	■有刺鉄線	△民家の置物 ▽飲食店店頭の表出(2) ○ビルの電飾 □人形 □歳時記の装飾
保育所分園	保育資源としての価値	□大小サイズの遊具	△フェンス □水辺 □神社 ○ステージ □丘	□芝生 □デザインされた舗装 □砂利と飛び石	■荒れた砂場 ■管理不足の公園	△坂道 □坂道 □砂利道(2)	□歩車境界のブロック ○オブジェ	□歩道橋 □跨線橋(3) □道脇の滞留空間 □電車が 見える場所						△駐車の杭あとの穴 △▽自動販売機		□鉢植えの花(2) ○魚やカエルが いる池 ▽鉢植えの花
																□電車(4) △民家の自転車 □自動車 △▽工事現場(2) の機材(2)

場面に分けられ、[立ち止まる・見る] 場面では「不満」評価がないことがわかる。この場面では評価の【理由】に「保育資源としての価値」が多い(図7)。「立ち止まる」場面でこのような特徴的な【評価】の様子がえられる要因として、移動場面での「道から見えるもの」には興味や関心があつた際に選択的に関わること、また「立ち

止まる」場面では安全面などとの兼ね合いでも立ち止まることができておりこどもの興味や関心にゆとりをもって応えられること、が影響していると考えられる。こうした道空間に隣接する空間の設えや視覚的な楽しみへの配慮、移動の途中に立ち止まれること、が移動場面での保育を充実させると考えられる。移動空間で立ち止まるために、指摘の内容から導出できる項目として、通行量に比して道幅が十分なことや歩道・歩行者スペースが整備されていること、外出人数に対して十分な滞留スペースがあること、などが挙げられる。

滞留/移動と身体的干渉の有無による保育場面での評価の傾向には、昼間里親と保育所分園での差異は見られず、小規模保育拠点に共通することが考えられる。しかし、「立ち止まる」場面の数は、昼間里親でより多く、外出時の保育規模や引率体制(5.2)、周辺環境(5.3 2))などが影響して、「立ち止まる」場面が取れている点は昼間里親での外出保育の特徴と考えられる。

6. まとめ

本稿では、公園などの都市の環境を保育の場とする小規模保育拠点のうち主たる調査対象に京都市の昼間里親を、また比較分析の対象に保育規模が異なる大阪市・保育所分園を選定し、制度設計と運営の実態を整理した。また、保育者が拠点外の都市空間を保育の場として利用する際の、都市空間の環境要素への評価をキャプション評価法を用いて収集し、保育の場としての都市環境に求められる配慮について分析・考察した。本稿での知見と考察は以下に整理する。

いずれの制度とも、今後とも拡充の方向にあり待機児童の緩和や地域での子育て、保育の場の多様性の確保などの観点で重要な役割を担っていくと考えられる。しかし既往研究同様²⁾ 制度設計上の問題に保育者の労働条件や保育拠点の確保への財政支援などが挙げられた。また、保育の場として必須の拠点外の都市空間については行政と保育現場での認識に差異があり、保育者からは公園などの屋外で遊べる空間の整備や、安全・快適な道空間への要望が聞かれた。これには、小規模保育拠点の承認にあたって公園への距離や経路な

図6 滞留/移動と身体的干渉の有無による保育場面と評価

図7 保育場面と評価の理由

京都市・昼間里親 (□ヒアリング, ■キャプション評価法調査), 大阪・保育所分園 (○ヒアリング, ●キャプション評価法調査)。無印と点線は分析・考察による。

図8 保育の場としての都市環境への要望事項とその構造

どの環境条件に規程がないことも一要因と考えられ、小規模保育拠点による保育サービスの提供を推進する際には行政としても都市空間の整備が必要となることを認識する必要性が示唆される。

都市環境評価では、いずれの拠点でも移動時間の長短によらず〔移動〕場面で指摘が〔滞在〕場面を上回っており、外出保育では〔移動〕場面でより多くのことが意識されることがわかった。また移動中に立ち止まれることで、こどもの興味や発話のきっかけとなる環境要素と関わりが生じていることもわかった。安全で、こどもの興味や関心を引く要素がある移動の空間を整備することで外出保育がより充実すると考えられる。また一方で、例えば坂道など危険性も伴うものの保育の機会として価値があると評価された環境要素もあり、安全性と保育資源としての価値は地域の環境条件や保育者の人員配置などとの関係によっても影響を受けることがわかった。

また昼間里親と保育所分園では制度上、拠点内外での保育時の集団形成に差異があった。人数規模が大きい保育所分園では年齢別保育だが、昼間里親ではいずれも異年齢混合保育で、保育者から家庭的な保育や子ども同士の育ち合いの点で評価されていた。外出保育は拠点の規模によらず全拠点で日常的に取り入れ、その体験を拠点内部での保育に活かす様子が観察され、拠点外の都市空間が保育の場として重要な役割を担っていることが確認できた。また昼間里親では外出保育をより積極的に行っていた。これには都市環境の条件の差異や、外出保育の人数規模の差異などが影響していると考えられる。

以上の分析・考察による保育の場としての都市環境への要望とその構造は図8のように整理できる。本稿では、保育の人数規模や周囲の都市環境の状況によって都市環境への評価やそれを踏まえた保育の内容が異なることが示された。小規模保育拠点制度は自治体によって保育の人数規模、集団形成などに差異があり本稿の成果が一概に当てはまらない場合もある。今後、対象事例を増して知見の一般化をはかり、また地域や制度の個性性に応じた望ましい制度と都市環境づくりのあり方への知見を得ることをさらなる課題とする。

謝辞 本研究は、財団法人旭硝子財団による研究助成を受けて実施しました。調査にあたり、京都市、大阪市、保育拠点の皆様にご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

注

注1) 自治体独自の認可保育所に準ずる保育施設である東京都認証保育所、横浜市保育室などでは、保育拠点を設置する際に拠点独自の屋外保育スペースをもつ必要はないが、公園などの“屋外遊技場に代わる屋外保育スペース”が近隣にあることが認証条件にある。ただし、その距離や時間距離、屋外遊技場の大きさについての規定はなく各運営者の判断にゆだねられている。

注2) ここでの都市構造とは、都市内・都市間の移動手段、就業地域と居住地域の位置関係および時間距離（職住構造）、保育所等の保育サービス拠点の数量と立地、を指す。

注3) キャプション評価法は、評価者が日常的に体験している環境のなかから「いい／悪い／気になる」事物を抽出してその評価理由を述べることで環境のなかで意識される事物や環境評価の理由を理解する手法であり、保育者が保育の場としての外部環境のなかで「どのような事柄を意識し」「どのように評価しているのか」を把握するために適切な手法であると考えた。

注4) 京都市のKA、KBについては1ルートに同行、2ルートは聞き取り後に該当箇所を調査員が訪れ、写真撮影と周辺状況の記録を行った。なお、同行調査は保育やこどもの体調等への影響等が懸念されるとの理由により、複数回の実施が困難な事例が多かった。KGでは、調査時点当時外出を控えていたため調査I・IIのみとした。

注5) 昼間里親運営者の経験年数に応じ、5名ないし10名以内と定められる。

注6) 例えばKFの場面②では、“【対象：踏切の段差】が、【理由：ベビーカーで通りにくい】ので【評価：不満】”と読み取れる。またKEの場面②のように“電車（が）興味や発話のきっかけとなる（ので）満足”、“電車が見えること（が）興味や発話のきっかけとなる（ので）満足”、“（歩行者専用道のため車などを気にせずに）道に立ち止まれること（が）ゆっくりできる（ので）満足”と、複数の評価対象と理由に分解される場合もあった。KE②では、電車ということの興味をひくものを、安全に立ち止まって見ることができるということが評価されており、その評価理由は〔保育資源としての価値（興味・発話のきっかけ）〕と〔安全性〕に整理できる。

参考文献

- 1) 厚生労働省：“社会保障審議会少子化対策特別部会 第1次報告 一次世代育成支援のための新たな制度体系の設計に向けて-”，<<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2009/02/dl/s0224-9c.pdf>>，2009.02.24，参照2009.08.06
- 2) 伊志嶺美津子，榎田紋子，小野壽美，田島恵子，江口玲子：家庭型保育に関する研究Ⅰ～Ⅵ，日本保育学会大会研究論文集，(51) pp.834-837 1998.04，(52) pp.772-775 1999.04，(53) pp.816-817 2000.04，(54) pp.762-763 2001.04
- 3) 松橋圭子，大原一興，藤岡泰寛，三輪律江，谷口新：地域における親子の居場所選択からみた子育て支援施設のあり方に関する研究 東京都三鷹市における外出調査より，日本建築学会計画系論文集，No.600，pp.25-32，2006.02
- 4) 社会福祉法人四恩学園（北浦かほる編）：夜間保育園の保育環境整備に向けて 調査報告書，2001
- 5) 赤木徹也，他：駅型保育園における環境整備条件に関する基礎的研究 その1～5，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1 分冊，pp.517-520 2004.07，pp.169-174 2003.07
- 6) 松橋圭子，三輪律江，谷口新，他：保育施設における園外活動の実態からみた地域資源の使われ方について 一横浜市を対象としたアンケート調査より，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1 分冊，pp.195-196，2008.07
- 7) 谷口新，三輪律江，松橋圭子，他：保育施設の園庭の有無と園外活動としての公園利用に関する考察，日本建築学会大会学術講演梗概集 E-1 分冊，pp.197-198，2008.07
- 8) 田中稲子，三輪律江，松橋圭子，他：横浜市における駅前保育施設の園外活動の場としての街区公園利用とその評価に関する研究，都市計画論文集 44-3，pp.373-378，2009.10
- 9) 小池孝子，定行まり子：都市部における保育施設の屋外保育環境について 東京都区部における複合型保育所の施設環境に関する研究 その2，日本建築学会計画系論文集 NO.628 pp.1197-1204 2008.06
- 10) 古賀啓章，高明彦，宗方淳，他：キャプション評価法による市民参加型景観調査 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集 NO.517，pp.79-84 1999.3
- 11) 小島隆矢，古賀啓章，宗方淳，平手小太郎：多変量解析を用いたキャプション評価法データの分析 都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その2，日本建築学会計画系論文集 NO.560 pp.51-58 2002.10
- 12) 趙晟恩，佐藤栄治，山田あすか，佐藤将之，西出和彦：多摩ニュータウンにおける子育て期の親による都市環境の利用と評価 子育て環境としての都市環境評価に関する研究 その1，日本建築学会計画系論文集 NO.643，pp.2003-1012，2009.09
- 13) 山田あすか，佐藤栄治，讃岐亮：小規模保育拠点運営者による子育て環境としての都市環境評価に関する研究 一世田谷区・家庭保育福祉員と京都市・昼間里親を対象として-，日本都市計画学会 都市計画論文集 No.44-3，pp.175-180，2009.10
- 14) NPO 法人家庭の保育全国連絡協議会，<<http://www.familyhoiku.org/>>，参照2010.03.08
- 15) 大阪市，こども青少年局子育て支援部保育指導担当，“認可外保育施設最新立ち入り調査結果”，<<http://www.city.osaka.lg.jp/kodomo/page/0000027886.html>>，参照2010.03.09
- 16) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局，“家庭的保育事業の実施について”，<https://www.k-jobnet.jp/?action=common_download_main&upload_id=312>，参照2010.03.09

（2010年3月24日原稿受理，2010年8月25日採用決定）